

# 「西南学院百年史」編纂について（答申骨子）

これは西南学院百年史編纂諮問委員会が、2006（平成18）年11月22日の常任理事会に提出した答申の骨子である。ここに参考のために掲載し、記録として残す。

## はじめに

西南学院は2016年に創立100周年を迎えるが、西南学院の歩みにふさわしい『西南学院百年史』（仮称）の刊行が期待されているところである。そこで本格的な編纂作業に着手する前に、その編集体制と編纂作業をどのようにするかを検討すべく、西南学院百年史編纂諮問委員会（以下「委員会」という）が院長のもとに2005（平成17）年3月17日に設置された。具体的に諮問された事項に基づき答申を提出する。

## ①『西南学院七十年史』の検証

創立40周年、50周年、と学院の発展の大きな節目を迎えるたびごとに学院史の本格的な刊行が課題となり、実現への努力がなされたにもかかわらず、実際には、それぞれわずか数十ページの写真を含んだ記念の小冊子が発行されるにとどまった。そのことを考えると『西南学院七十年史』は、これだけのものを作り上げた業績を大いに評価できよう。

しかし、七十年史の編纂作業を見ると、資料を集めて整理しそれらを展示し、かつ七十年史をまとめることには成功したが、作業を共同作業として進める点にいささかの問題を残していた。また、西南学院の歴史に関連が薄いと思われるいわゆる前史の部分に他に例を見ないほどページを割いている。これらに今後、検討すべき課題を残している。

## ②他大学史の調査・検討

すでに百年史を刊行している他校のもの、特にキリスト教系学校の百年史を参考にした。大学図書館には、いくつかのキリスト教系学校の百年史が収蔵されているが、それらを創立100周年を迎えた順に並べると以下ようになる。

1975年創立100周年	『神戸女学院百年史』 2巻
1978年創立100周年	『梅花学園百年史』 1巻
1984年創立100周年	『関東学院百年史』 1巻
1985年創立100周年	『北陸学院百年史』 2巻、『福岡女学院百年史』 1巻
1986年創立100周年	『東北学院百年史』 2巻
1987年創立100周年	『北星学園百年史』 2巻、『名古屋学院百年史』 1巻
1989年創立100周年	『関西学院百年史』 4巻

上記学校の中で、100周年を迎えて、その年に百年史を刊行したのは、関東学院、名古屋学院の2校であり、他はいずれも100周年後である。それも福岡女学院の2年後から、梅花学園の最高10年後と様々である。

西南学院が、百年史を100周年の年に刊行するとした場合、90周年をひとつの好機と捉え、その準備に入るのが賢明であろう。

### ③西南学院史資料の調査・整理

西南学院史関連の資料は内容別に35のボックスに保存されており、さらに個別のファイルに分けられている。それらのファイルに少ないもので数点、多いもので百点に近い資料が収められている。

ボックスの資料だけでなく、学内の刊行物、写真、アルバム、新聞切り抜きなどほとんどが整理されているが未整理の部分もあり、今後に精力的な整理の作業を残している。さらに必要な史資料の収集も残されている。

### ④『西南学院百年史』（仮称）編纂に必要な資料等の洗い出し

現時点で想定される刊行物を提示する必要があるが、これまで委員会の議論から、「西南学院百年史通史」、「西南学院資料集」が必要であろう。それは百年史が資料、特に南部バプテスト連盟外国伝道局等の在外資料が十分準備された段階で執筆されるべきであり、歴史的批判を踏まえて学院の歴史像が組み立てられるからである。その上で、学院の教育理念とその歩みを示す「西南学院教育者群像」といったものが有用だと思われる。これらは一般に読まれるだけでなく、カリキュラムにおいて「西南学院と建学の精神」（仮称）などといった正規の授業の自校史テキストとしても使うことができる。

## ⑤『西南学院百年史』（仮称）編纂方針の提示

百年史編纂作業は、当初の5年間で史資料の収集、整理、分析、さらに年表の作成、重要な諸問題に関する共同研究などが想定される。これら基礎的な作業におよそ5年をかけて基本的な資料が整理され、いよいよ執筆への必要な準備がなされるであろう。その後も史資料に関わる作業は続けられるが、その間に約10名程度の執筆者を育てていること、執筆者の間にほぼ共通した学院史に対する認識があること、基礎的な資料が整理されていること、執筆内容がかなり精密に策定されていることが必要である。

これらを踏まえると、百年史編纂の取り組みの組織上の概要が浮かんでくる。

### a) 百年史委員会

まず、百年史編纂作業に最終的な責任を持ち、大所からアドバイスし、おりおりに執筆者等で組織される実務委員会の報告を聞き判断する包括的委員会が必要である。常任理事会がこれを兼ねるのが現実的だと思われる。

### b) 百年史編纂委員会

百年史編纂委員会は、実際に百年史編纂のための作業、史資料の収集、分析、整理、研究、そして執筆にあたる者等で組織される委員会で、いわゆる実務委員会としての性格を持つ。この委員会には各学校から、満遍なく委員を集めることが望ましいが、実際には原稿を書ける人を集めなければならない。これらのバランスを勘案した陣容が望まれる。なお、執筆者として10名程度があたることが望まれる。

### c) 事務局

事務局は当面は、企画広報課があたる事が現実的であろう。やがて、学院史資料の展示会や博物館での学院史関連の特別展の企画なども必要になる。また、後に述べるように資料整理も直ちに重要性を持つ。どこかの時点で、企画広報課から事務局を切り離すことも必要になるであろう。

## ⑥その他

### a) 『西南学院史紀要』の発行

創立90周年の記念事業の一つとして『西南学院史紀要』の発行を企画したが、この紀要が好評で、年に複数回の発行を検討してはどうかという意見も出された。現在のところ発行は年1回とし、軌道に乗れば回数を増やしていくことも考えられる。

## b) 史料展示の企画

学院史の史料展示は大学博物館で一部行っているが、さらに史資料等が整理されると、多くの人に学院史に対する理解を深めてもらう展示を企画する必要が生じるだろう。創立当初の学生の写真やパネル、アルバムなど身近に感じられるものを中心に展示し、場所は、学外連携施設が完成すればそこが適当だろう。

## c) 学院史資料室の整備

この20年の間に学院史資料の移転が4回も行われた。特に学院史資料展示室がなくなってからは、もともと整理してあった資料も散逸し、その当時梱包した資料を開封していない現実もある。これらの第一の原因は資料室が定まっていないことにあると言えよう。移動を重ねるたびに資料の配列や順番が狂ってきている問題もあり、すみやかに必要な広さを持つ資料室を準備し、学院史の史資料を1ヶ所に集めて整理することが重要である。なお、資料室には史資料を保存する場所とそれらを整理・分析する作業場を兼ねた事務室が必要である。

以上

西南学院百年史編纂諮問委員会

委員長 塩野和夫（大学国際文化学部教授）

委員 小林洋一（大学神学部教授）

委員 伊原幹治（高等学校教諭）

〔2006（平成18）年11月22日常任理事会報告了承〕